
おっさん企画「もう一度あなたと」

nico

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おっさん企画「もう一度あなたと」

【Nコード】

N9285E

【作者名】

nico

【あらすじ】

軽い気持ちで会社をさぼった青年は、とんでもないことに巻き込まれてしまう……。そんなお話です。

「何だこのすつげえ人」

草深雪次は渋谷駅から出た途端、人の多さに絶句した。

八チ公前は縁日のように人で溢れかえっていて、なかなか前へ進む事は出来ない。平日にもかかわらず、だ。

そんな平日出歩く彼は、もちろん会社をさぼっていた。職場は新宿にある為、渋谷で遊んでいても見つかる事はない。

「異常すぎだろこれ」

想像を絶する人、人、人。目の前のスクランブル交差点に到達するのも苦勞する程、波は延々と続き、途切れる事を知らないでいる。その上車も混雑しており、原因は堂々と路上駐車をする選挙カー。演説を聞く年輩の人々も手伝って、駅前広場はすさまじい人口密度。雪次はこいつのせいかと、憎々しく大きなワンボックスカーの上に立つ男を睨んだ。

スピーカーから大音量で声が流れる。

「『今の政治は間違っています！ このままでは日本が……』」

「つか、間違ってるのはお前だし。俺に迷惑かけすぎてるだろ」

ワンボックスカーの上には3人の男が立っていて、各々が仕立ての良いスーツを着こなし、いずれも良い物を食べているであろうメタバ体型。演説しているのは中央に立つ『秋前』という男で、雪次は絶対おまえになんか投票しないと、その顔を目に焼きつけた。髪の毛が乏しい、世に言う一般的なおじさん。

高らかに響く秋前の主義主張などは聞きたくはなく、彼はipodの音量を上げた。が、無駄な事。スピーカー越しの声は大きくて、逆に音楽は揉み消されてしまう。

「うぜえぞ秋前」

独り言も、すぐさま大音量に消えていく。

ようやく交差点に到達した彼は、その先に続く道を見、苦笑する。センター街まで延々と伸びた人の帯。同時に今は8月で、世間は夏休みである事に気がつき、溜息をついた。

「最悪」

人気の映画を悠々と空いた所で見るもくろみが、彼の中で崩れ去る。これでは会社をさぼった意味はなく、視線は無意識に泳ぎ始めた。

と、その時、視界に入ったおさげ頭の女。真夏であるのに、ざっくりニットと膝丈フレアスカートを着込んでいる。

この季節、暑苦しい女など目の毒にしかない。

「暑っ」

雪次は目を逸らし、TSUTAYAのモニタの方を見た。女のおかげで体温があがったのか、さらに汗が吹き出してくる。彼は面倒そうに手で拭うと、急遽カフェに行く事にした。喉はひどくカラカラだった。

「一人です」

店員に伝えた彼は案内され、端の席にどかりと座った。

カフェは黒と薄紫を基調にした作りで、アナスイを意識しているかのよう。そのため女性客が大半を占めている。

オーダーを済ませた彼は、水をすべて飲み干した後、インテリア雑誌を読み始めた。

「あなた、私が見える？」

突然の声に、俺？　と思いつつ、彼は頭を上げてみる。が、途端、顔は凍り付く。

目に映るのは、おさげの女。つい先ほど交差点で見たとおり、季節外れも甚だしい服。

店内は冷房が効きすぎているにも関わらず、彼の額に汗が玉となりびっしり浮かぶ。

彼は驚きすぎて声も出ず、代わりに音を立てて生唾を飲んだ。

「ねえ、見える？」

「見えません」

そう答えるのが精一杯。

「嘘」

女は悪戯っぽく片眉を上げ、断りもせずに向いの席についた。

「何で座るんだよ」

人目を気にし、彼は露骨に嫌な顔をする。夏にカウチンセーターとビロードのスカートなど、正気の沙汰とは思えない。女を自分の連れとは思われたくなく、少しでも離れて見えるよう、彼は上体を後ろへ逸らせた。彼の中で、小さなテーブルに夏と冬が対峙する図は、実に奇妙でありえない。——しかしそれは“見える者”が思う事。

彼が気づくのは、5分ばかり経った頃。店員は女が存在をことごとく無視するし、あるうことか堂々と素通りし、雪次のアイスラテを運んでくる。近くに座る人も冬の女に目もくれず、気づく素振りを全く見せない。まるで女は空気そのもの。その事が雪次の核心をつく。

「アンタ幽霊？」

聞くが、女は首を傾げる。

「どうなんだよ」

「そうかもしれないし違うかもしれない」

「何それ」

雪次は音を立て、30秒もかからずにラテを全て飲み干した。一刻も早く店を出、女と離れようと思ったからだ。

「あなたは私を怖がらないのね」

「慣れてるし」

「靈感あるのね」

「いないけどね」

言うと女に目もくれず、急いでレジへと歩いていく。彼の中で行き先はすでに決まっていた。

「ちよつと待ってよ、話し足りないわ。もう少し話しましょう?」

「お断り」

雪次は足早に去っていった。

コンビニで塩を買い、つまんで身体にふりかける。

雪次は細心の注意を払って女がいない事を確認し、映画館に入っていた。上映する映画は興味の無いものだが、見たい映画は長蛇の列で、渋々空いていそうなものを選んだのだ。

「やっぱりつまんねえ」

これが彼の感想だ。周りの観客も金返せと言わんばかりの表情を見せている。

「ほんとつまんなかったわね。どうかしてる」

雪次の背後から声がする。「まさか……」と、恐る恐る振り返ると――眼に映るのは、おさげの女。彼の心臓は飛び出そうになる。

「脚本が良くないわ。制作費はすごくかかってるんだろうけど、はつきり言ってすべてが無駄ね」

「何でアンタがここにいるんだ」

「映画を見ていただけよ。いけない？」

絶句する雪次を後目に、女はビルのウィンドウに近づき、飾られているトルソーの服を見る。

「あの服かわいいわね。私に似合うと思わない？」

「知るか。俺について来ないでくれ」

「いいじゃない、ケチ言わないで」

「俺、塩ふって清めたんだけど」

女は不敵に口角をつりあげ、肩をすくめた。

「塩？　それが何。言っとくけど効かないわよそんなもの」

「……まじ？　塩って効かないの？」

「私にはね」

得意げに言う。

「つか、俺について来てどうすんの」

「別に」

「別について」

「これから考えるわ」

雪次は迷惑そうに女を見た。女は背筋を伸ばし、飄々としている。そして無邪気に笑むと、

「人と話すのはすごく久しぶりなの。楽しいわ。私たち、気が合いそうだと思わない？」

「全然。迷惑だからもうついて来ないでくれ」

なめまかしくおさげに触れた女は、憎々しげに鼻で笑う。無邪気さは消え失せていた。

「ねえ、知ってる？ 私の声はあなた以外には聞こえないの。つまりあなたは独り言を言っている状態ね。周りの人はどう思うのかしら。少しだけ心配だわ」

雪次ははたと直立し、周囲をキョロキョロと見渡した。幾人かがこちらを怪訝な顔つきで見ている。

「やべえ」

青ざめた雪次が取れる行動はただ一つ。それは足早に帰ること。

「へえ、けっこういい部屋」

女は雪次よりも先に入っていく。彼はひどく不機嫌に、

「誰が家に来る事を許可した？ 帰れ！」

「ケチ。そんなことじゃモテないわよ？」

振り向いて言つと、勝手にすると奥へ進み、ソファアにふわりと腰掛けた。それは先日雪次が貯金をはたいて買った、イデーの布張りの椅子。当の雪次だって数える程しか座っていない。

「お前は床に座れ」

「なによそれ、優しくないわね。絶対彼女いないでしょ？」

いちいち勘にさわることを言う奴だな。と、雪次はパソコンの電源を入れた。彼は『除霊』という言葉を検索するつもりだ。

「ソファアもいいけど、このラグマットもいいわね」

言われてマットを見た雪次は、視界に入った女の足元に、沸々と怒りを煮えたぎらせることとなる。

「てめえ！ 土足で家に入りやがって。脱げ！」

女の足を包むのは、黒いワンストラップシューズ。堂々とマット

に足を乗せ、くつろいでいる。

「何よ神経質ね。ああいやだ、もしかして潔癖性？」

「違う！ 引越したばかりなのに、買ったばかりのマットなのに、ここは外国じゃないのに、お前はなんて事をするんだ！」

女はウフフと顔を歪めると、「安心して」と合図をした。

「できるかよ！」

「あら私は幽霊よ？ この部屋を汚す事はないし、第一靴は脱げないの。脱げるものなら脱いでみたいわ。そうすれば足の爪を見せてあげられるのに。けっこう形が自慢なの。……ところであなたすごい汗だけど、エアコンつけたら？ 見ていてとっても暑苦しいわ」

女の言う通り、雪次は滝のように汗を垂らしている。

「うるせー！ お前なんか暑苦しいと言われてたまるか」

言いながらエアコンのスイッチを押した。涼しくなるまで大分かかりそうである。

「なによ、正直に言っただけなのに」

「黙れセーターのくせに！ ……くそつ、やってらんねえ」

雪次はそう言い残すと、サイフを手にし、外へと飛び出していった。

「どこへ行くつもり？」

相変わらず女は雪次の後を追いかけて来る。彼は振り向き、小さく舌打ちをした。

「ついてくるな！」

逃げるようにして駆けた。が、女もすぐさま走り、追いついてくる。

息が切れている雪次に対し、女は涼しげ。彼は心底むかついた。

「うぜえからついてくんな。コンビニでアイスを買っただけだ」

「アイスはあまり体によくないわよ？ 私、アイスの食べ過ぎで胃を壊した事があるんだから」

「知るか」

100メートルほど歩いた先に、目的のコンビニはある。二人はその後無言で歩いた。

そして程なく20メートルばかりでコンビニに着くという頃、女は口を動かした。

「ねえ、マンシヨンの鍵、かけてないわよね？ あのソファーに机、パソコン、高そうだわ。盗まれてもしたら、あなたはとうなっちゃうのかしら。私はその姿、易々と想像できるけどね」

歩みを止めた雪次は、額から嫌な汗を滴らせた。

「早く言え！ くそ、お前どうかしてるぞ」

「あなたが私にいじわるな事ばかり言うからよ。これに懲りたら、少しは優しくすることね」

「うるせー！」

雪次は全力疾走で家へと戻る。

家へ着いた頃には疲労感がつり、アイスなどどうでもよくなっていた。

「アンタさ、この世に何の不満があるわけ？」

雪次がそう問うたのは、女が住みついて3日めの事だった。

「不満？ これとってないわね」

女はソファーの上で体育座りしている。スカートの中は見えそうで見えず、それは彼をドキドキさせた。

「残念ながら私は毛糸パンツを履いているの。だから目当てのものは見えないと思うわ。ダサくて恥ずかしいからあまり凝視しないでくれる？」

「うるせー！ 凝視なんかしてねえよ。つか、不満ないなら今すぐ

成仏しろ！」

「それは出来ないわ。私はこの世に未練があるから」

「未練が無ければ成仏すんの？」

「多分ね」

「多分かよ」

げっそりしながら彼は部屋の片隅にあるダンボールのガムテープを外していく。中身は野菜。それは実家から送られてきた荷物であった。

「アンタの未練って何」

雪次は野菜を床にひとつひとつ置きながら聞く。

「それはあなたに関係ないわね」

「まあ確かに。……で、成仏するまでどうすんの」

「ここにいるわ」

「それは困る」

ギロリと女を睨み付けた。が、女は素知らぬ顔で雪次に歩み寄ってくる。

「なんだよ」

「野菜、ね。健康にいいわよ。外食ばかりせずに自炊してもりもり食べなさい。快便になるから」

「うるせーよ」

女はおもむろに床に置かれたトマトに触れた後、確認するように雪次を見た。その手はスカスカとすり抜け、掴む事が出来ないでいる。

「何やってんだよ」

「見た？ 私、トマトすら掴めないの。不便で可哀想だと思わない？」

「別に。霊だろお前」

「でね、相談があるんだけどいいかしら」

「聞く気ないし」

ぶっきらばうに言う。

「相談と言つのはね」

「聞く気ないって言つたよな？」

彼はドンと床を叩き、けん制する。が、女は全く聞いてない。

「憑依っていうのかしら？ あなたに憑いてみようと思うの。……
良い？」

「良くねえよ！」

「ずっと考えていたのよ。あなたに憑依することができれば物を持つ事ができるし、料理を作ることできる。それから色々な事ができるわ。そうすればこの世に未練が無くなるだろうし、きっと晴れやかに成仏できると思うの」

「知るか！ だいたいアンタは赤の他人だ。なんで俺が憑依されなきゃならないんだ」

「怖がらなくてもいいわよ？ 大丈夫、優しくするから」

「は？ その答えはどう考えてもおかしいだろ！？」

女は含み笑いをしつつ、仁王立ちで彼の前に立ち塞がる。

「てめえふざけんな！ 何のつもりだ」

雪次は手に持つきゅうりを3本ほど投げつけるが、虚しく女を通り抜ける。

女は顎をひいて上目遣いに雪次を見、冷ややかに笑っている。そのため黒めがちの瞳は三白眼となっていた。

「くそつ、やめろ、絶対寄んな！」

女は彼の言葉を聞き入れず、じりじりと両手を広げて彼を包み込もうとする。

「来るな！」

「……そういえば聞き忘れていた事があるのよ」

真っ赤な唇は、ゆっくりと言葉を紡ぎ出していく。

「あなたの名前は？」

「言……」

雪次が口を開いた瞬間——彼女は煙となり、彼の中へと溶け込んだ。

佇む彼は、ズンと重い衝撃を感じ、顔を歪めてその場に倒れた。

あれから1時間ほど経ったであろうか、彼はむくりと起き上がる。辺りはすっかりと仄暗くなっており、窓には鏡のように彼が映っていた。

窓辺に歩み、顔を近付けていく。金に近い茶髪、年若く見える童顔を確認すると、彼はすぐさま頬に触れ、つねったり叩いたりし、感触を確かめた。

「成功しちゃった」

満面の笑みで言う。

それから窓に背を向け、

「あー、あー、あー」

発声練習のように大きく声を出し始めた。それは雪次のものではなく、細くて高い女の声。

「ちゃんと出るわね。……洋ちゃんは信じてくれるかしら？」

不安げにテーブルに寄ると、置かれた携帯電話を掴み、慣れた手つきで番号を押していく。

やがて数回コールの後、

――『もしもし』

彼の肩はびくりと跳ねた。

「洋ちゃん？ 私、桜子よ。久しぶりね」

電話の相手は息を飲み、むっつりと押し黙ってしまふ。続く沈黙に桜子は焦り、肩で息をし始めた。

「洋ちゃん返事をして？ あなたの声が聞きたいの」

―『質の悪い悪戯は止してくれ。彼女は亡くなったんだ』

「ええ、死んだ。だけど本当に私なの。信じて。私の声を忘れた？」

―『忘れてない。……本当に君は桜子なのか？』

「そうよ」

―『会えるのか？』

「会うわ。住所を言うから来てくれる？　あなたに伝えたい事があるの」

―『ちよっと待ってくれ、メモを』

桜子はマンションの住所を告げた。相手は2時間後に必ず行くと言い残し、電話を切った。

部屋には包丁の音がリズムカルに響き、同時にポコポコと煮立つ音も聞こえている。

「洋ちゃんは食べてくれるかしら？」

桜子は鍋のスープを小皿にすくうと、一口こくりと飲み、

「上出来！」

と自画自賛した。

【熱っ！……な、何？】

頭にぐわんぐわんと声が響く。紛れもない“雪次”本人の声。

桜子は火を止め、嬉しそうに微笑んだ。

「あなた、気がついたのね。気分はどう？」

【最悪。超頭痛えしだるい。……アンタ、俺に何をした？】

「憑依ね。私はあなたになってるの。まさか成功するとは思わなか

ったけど」

【くそっ、出てけ！】

「それは無理よ」

【いいから出てけ！】

「癩癩起こさないでよ。あなたカルシウム不足だわ」

言いながら、引出しからダシ用の二ボシを取り出し、3匹ばかりバリボリと頭ごと食べた。

「料理作ってるんだから少し黙っててよ」

【この状況で黙れるかよ！】

「黙らないなら、私は一生あなたに憑いたままにいるかもね。いいの？」

【くそっ】

以降雪次は沈黙し、されるがままになっている。桜子はいえ、真剣に料理を作り続けていた。

「そろそろ洋ちゃんが来る頃ね」

逐一時間を気にしていた彼女は、エプロンを外し、窓を目指した。

【は？ 来るってどういう事】

「人を呼んだのよ」

【ここへ？】

「そうよ、いけない？」

【ダメに決まってるだろ！ ここは俺の家だぞ！？ 非常識だ！】

やがてマンションの路肩に一台の車が止まった。それは場違いな程大きな車。

見慣れぬ車に雪次は魅入り、

【すげえ、ロールスロイスじゃん……初めて見た】

「洋ちゃんの車だわ」

【ええっ！？】

高級車はチープな建物に相応しくなく、周囲に圧倒的な威圧感と存在感を放っている。

【お前、社長の愛人かよ。あの車は普通じゃねえだろ】
「違うわよ失礼ね。洋ちゃんは……」

……ピンポーン

話の途中で呼鈴は鳴った。

「桜子！」

野太い声が、大声で響く。その声を聞き、雪次はやくざかもしれないと肝を冷やした。

「洋ちゃん、今開けるわ」

【やめろ、開けんな！】

彼女は雪次を華麗に無視し、洋ちゃんを招き入れる。

ドアに登場した洋ちゃん……それは髪の毛が乏しい、何の特徴もないおじさん。その不様なメタボ体型は、オーダーであろう仕立ての良いスーツに包まれている。

【ちよつ、こいつ……】

見覚えのある顔に、雪次は目を疑い困惑した。目前に立つ男は忘れもしない、先日渋谷で混雑をひき起こしていた、選挙カーの“秋前”にほかならない。

対し、秋前は面喰らったように、玄関先にすらりと立つ青年――

桜子を見上げた。その身長差、およそ15センチ。

「き、君は桜子の息子か……？」

秋前は驚きの表情のまま、アイロンが施されたシルクのハンカチで終始汗を拭っている。

「ちがうわ。私は彼に体を借りているの」

「体を、ね」

目を細めて言った。それは疑念に満ちている。

「洋ちゃんお願い、信じて！」

「……声はたしかに桜子だが、こんなことが現実にあっているのか」
「あるわ！　だって私が桜子なのは事実なんだもの」

桜子は胸に手を当て、涙目で必死に訴えている。

「分かったよ……君を信じる。だが、私に事情を全て話してくれる
ね？」

「もちろんよ」

彼女はスリッパを用意すると、「上がって」と、秋前に言った。

【おい、待てよ！　なに図々しく家に上げようとしてるんだ。ふざけんな！】

雪次の声が聞こえるはずもなく、秋前はためらいもせず、与えられたとおりにスリッパに足を入れる。

彼女は優しく秋前の背に触れると、奥へと案内していった。

【どうかしてるぞ、お前ら。赤の他人じゃねえか！　ほんとお前ら、誰なんだよ！】

女の名前は木原桜子。秋前洋一の婚約者。

30年前、女は結婚式を控えた前日、交通事故でこの世を去った。死んでからもこの世に留まり、女は男を見守り続けた。それは30年の月日に及ぶ。

渋谷で雪次と女が出会ったのは、女が男をその日も見守っていたからだった。

1時間ばかり桜子と秋前の会話を聞いていた雪次は、大体の事を把握した。

雪次としては二人の関係など全く興味はないが、嫌でも会話は聞こえ、知る事となってしまう。

「桜子」

「洋ちゃん」

見つめ合う二人は甘い世界を作り出していた。

桜子を通してダイレクトに雪次にも感覚は伝わり、その脳裏には秋前の姿がまざまざと浮び上がっている。

【こんなおっさんこれ以上見たくねー！】

雪次の大切なソファーに深々と腰掛けた二人は、恋人のように体を密着させている。

途中秋前は彼女の足をさすったり肩を抱いたりして、愛情表現を忘れなかった。

【死ね！ これは俺の足で俺の肩だ！ 腐る！ 離れる！ キモい！】

叫んでも叫んでも、二人は離れようとしなない。雪次は度々近づい

てくる秋前のテカった顔を見ながら、もしやキスされてしまうんじゃないかと心底脅えた。

そんなピンチの中、状況を変化させたのは、秋前だった。

「君は電話で私に伝えたい事があると言っていたね。それは何だい？」

変わらず肉圧の手で桜子の肩を抱いている。

「ええ、言うわ。……変ね、緊張しちゃう」

顔を赤らめ、恥ずかしそうに肩をすくめた。

「私の伝えたい事はね、洋ちゃんに幸せになって欲しいってことなの」

「私は幸せさ。君と話せるなんて」

言いながら秋前は、彼女の額にゆつくりとキスをする。

【ギャーーーー！】

雪次は大きく悲鳴をあげた。

「うるさい、邪魔すんじゃないわよ！」

たまらず桜子は、雪次に向って声をはりあげるが、

「さ、桜子……！？」

秋前は目をぱちくりとしばたかせた。

はっとした彼女は首を激しく振り、否定する。

「違う！ あなたに言ったんじゃないの。信じて！」

桜子は秋前の胸に顔を埋め、その背に手を回した。

秋前は彼女の背を優しく優しく撫で、

「……驚いたよ。私は君の発言を遮ってしまい、憤慨させてしまったかと」

「洋ちゃん聞いて。私が伝えたい事はね、あなたは30年間も独身を通してるけど……だけど私はそれを望んでないの。どうか自分の

幸せを考えて？ 必要なら私を忘れてもいい。良い人を見つけて欲しいの。私の望みは洋ちゃんが幸せになる事だから」

「桜子、私は君以外の人なんか」

「だめよ、それじゃあ洋ちゃんは不幸だわ。ずっと一人ぼっちじゃないの。寂しすぎるわ」

「不幸？ それは違う。私は君を思い出す度、幸せを感じていたんだ。それはこれからも変わらないよ。君を忘れるつもりはないし、忘れたくはない。無論君がいなくて寂しいというのは事実だがね」

桜子は瞳をはらはらと濡らしながら、秋前を熱く見つめた。秋前も同じく桜子を見つめている。視線はねつとりと絡み合い、雪次はひどく身の危険を感じた。

「桜子」

「洋ちゃん」

秋前の分厚い唇は、みるみるうちに彼女に近づいてくる。

桜子はゆっくりと目を閉じていった。

【うわっ、やべえ！ 絶対キスだ。やめろ、ギャー！ ありえねえ！】

「……洋ちゃん待つて」

二人の口が触れる寸前、絶体絶命の雪次を救ったのは桜子だった。「どうした？」

秋前は桜子の両肩をもち、顔を離していく。しかし絶えずその視線は熱を帯びていた。

「不味い事が起きたわ。洋ちゃん、私、きっと今すぐ成仏してしまう！ 今怖いくらいに幸せなのがいけないのかしら？ あなたに伝えたい事を言ってしまったから？ とにかくこの世に未練が無くなってしまうたのよ。ああ、意識がなくなりそう」

「なんだって、成仏だって！？ それは困る。せっかく会えたのに」

「洋ちゃん、私はあなたを愛してる。どうか幸せに。って、やだ、私、料理…をあなた…に…作…」

言いながら彼女は――青年は、突然秋前の腕の中で気絶した。

「桜子！ 桜子！」

秋前は雪次を壊れ物を扱うようにして、揺すり続けていた。

「ん……」

雪次は眉間にしわを寄せた後、ゆっくりと目を開けていく。が、直後唇に不気味な暖かさを感じてしまう。

彼の口は秋前の唇でしつかりと密封されてしまっていた。

「ぶはっ！ きたねえ！」

雪次は秋前の頬を思いきり殴った。

「この変態！ ゲイ野郎！ 死ね！」

秋前は冷静に襟を正すと、ひとつ咳払いをし、雪次に握手を求めてきた。

「初めまして、秋前です。桜子がお世話になりました」

当然ながら雪次は差し出された手を振り払い、

「黙れ！ てめえはどうかしてるぞハゲ！」

「桜子だと思い、キスしてしまったんだ。失礼」

言って、ハハハと大口を開けて笑う。

「笑い事じゃねーぞ、このデブ！」

雪次は思いつくありとあらゆる言葉で罵倒するが、秋前は持ち前の大黒様のような笑みでかわしていく。

「ところで桜子は成仏してしまったのかな」

「知らねえよ！ 成仏したんじゃないの？ 俺の中にはもういねえ

し」

「そうか……逝ってしまったのか」

秋前はハンカチで目頭を押さえた。その肩は小刻みに震えている。その間雪次はキッチンに向くと、口をごしごしと洗い、うがいをした。

「すまない、長くお邪魔してしまったね。私は帰るよ」

言つと秋前は内ポケットから名刺を取り出し、雪次に渡した。それは箔貼りおよびUV加工が施された、贅のかぎりをつくした名刺。

「君には世話になったね。私が桜子と話せたのは君のおかげだ」

「別に」

「私は桜子を忘れない事をここに誓うよ」

「俺に誓うな！」

「ところで君はいくつなんだい？」

「23」

秋前は雪次の手を両手で握り、有無を言わず固く握手をし始めた。

雪次は露骨に嫌な顔をし、手を振り解こうとするが、肉厚の手は微動だにしない。

「君、来月の6日、秋前洋一に清き1票よろしく頼むよ」

「お断りだ！」

迷わず雪次は即答する。

「君とは酒を酌み交わし、桜子の思い出を語りたいんだ。どうも君は他人とは思えなくてね。……また来るよ」

「来るな！」

「来週土曜日の夜、11時」

「だから来るなって！」

再び大黒様のような笑みを浮かべると、秋前はさわやかにドアの向こうに消えていった。

おさげの女が去った部屋、そこには料理がふんだんに残されていた。

机に所狭しと皿が並べられ、どれも美味しそうだが、

「なんだこの異常な量の多さ……。つか、塩っぱい！ 不味っ！」
全ての味は狂っていた。

「くっそー。どうしろっていうんだよ。あのクソ女、野菜をほとんど使いきりやがって」

途方に暮れ、ゴミ箱に捨ててしまおうと視線を移した時、雪次の視界に一枚の付箋が入った。それは冷蔵庫に貼付けられている。

「なんだこれ」

——付箋にはこう書かれていた。

名も分からぬあなたへ。

あなたがこれを見たのなら、私は成仏したのでしょうか。どうもありがとう。

料理は全て洋ちゃんのものだけど、冷蔵庫にある分は全てあなたのものです。温めて食べてね。

そして、秋前洋一に清き1票よろしく願います。
投票しないと、あなたを呪うかもね。

桜子より。

「くくそ！……どうも……」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9285e/>

おっさん企画「もう一度あなたと」

2010年10月8日15時11分発行